

癸亥著「競争社会を取り戻す必要」大機小機、日本経済新聞 2010年12月4日朝刊を読む

競争社会を取り戻す必要

1. (1) グローバル化の波がいや応なしに日本を襲っている。
(2) 新興国経済の追い上げ、オホーツク海から東シナ海にかけての国家間の緊張の高まりは、日本がいつまで経済大国の地位を保てるのか、またその地位に寄りかかり続けられるのかという警鐘でもある。
2. (1) 肝心の日本には、その警鐘にすぐさま対応できる力がない。ひ弱である。
(2) 政治ばかり、企業ばかり、国民ばかり。高度成長期の成功に酔いしれ、経済大国の地位に安閑としすぎ、克己勉励と競争の精神を忘れてしまった。
3. (1) 政治は農業の保護を最重要課題としてきたが、その保護も高齢化の前には無力である。
(2) 保護の名目でいくら予算を積んでも、予算が農作業をするわけではない。
(3) 農業のあり方を抜本的に見直し、魅力ある産業に育て上げ、民間資本の参入を促さないかぎり、農業に明るい未来はない。
4. (1) 日本企業の競争力も劣化している。
(2) 「世界の」という形容詞を冠せられる企業が何社あるのか。
(3) 投資家は企業に投票し、株価を決定する。
(4) 現実の日本は、株価低迷が長期間続き、世界の時価総額ランキングから脱落する企業が相次いでいる。
(5) その一方、危機感のない上場企業が目立つ。
(6) 株主のみならず従業員さえ幸福にできず、それでいて地位に執着する経営者が多すぎる。
5. (1) 上場企業から上場資格を取り上げるのは難しい。
(2) では、時価総額や企業業績の劣る企業を東証第1部から第2部へと、もっと積極的に指定替えできないのか。
(3) 明朝には第1部を日本代表だけの市場とすることにある。
(4) そうすれば、企業は指定変えされないように努力し、競争するから、株価指数も自然と上昇する。

- 6 . (1) 最も重要なのは、教育である。
(2) 大学入学が難しく、卒業は簡単という今の制度は完全に間違っている。
(3) 楽しい大学では、世界のレベルに取り残されて当然であり、グローバルな競争に完敗してしまう。
- 7 . (1) 一定の学力があると認定されれば、どの大学にでも入学できるようにする一方、入学後には毎年厳しい進級要件を設けるべきである。
(2) 卒業できない学生が大量発生する。
(3) だからこそ学生は必死に勉強する。
(4) 残念ながら、教育は長期投資だから、今すぐ実行しても手遅れかもしれないが。
- 8 . (1) グローバルな時代を生き残るためには、競争を恐れないことである。
(2) 競争を避ければ、日本全体が地盤沈下していくのは必定だ。

[コメント]

競争社会を取り戻すためにはどうしたらよいか。農業、企業、大学の 3 つの観点からの厳しい御指摘だ。すべて正しくこれ以外にない。この競争社会を取り戻すという観点からすべてを見直し、日本の潜在能力を顕在化させれば、この国は永続的な社会を国民にもたらし、世界の発展にも寄与できる。自分たちさえよければと言う考えならば日本に将来はない。

- 2010 年 12 月 4 日 林明夫記 -